

[シリア]

パレスチナ難民の子どもたちに音楽の魔法を!

厳しい境遇に置かれたパレスチナ難民キャンプの子どもたちの心を音楽の力で豊かにしようと、青年海外協力隊員が奮闘している。

Close Up!

シャイカのあしあと



鮮やかな衣装を着て舞台上に立ち、誇らしげに歌う子どもたち。会場には中東・シリアの民謡のほか、「ふるさと」や「大きな栗の木の下で」といった懐かしい日本の歌も響き渡る。ここはシリア西部の町ハマ。今年3月、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）が運営する国内6都市の難民キャンプの小学校から6年生約150人が集まり、「シンデレラコンクール」が開かれた。

火付け役は、難民キャンプ内の小学校で音楽を教える青年海外協力隊員。今年で2回目のこのコンクールは、隊員が全国のキャンプの音楽教員に向けて研修や教材作成を行う「シンデレラプロジェクト」の一環で、キャンプの外に出る機会のない子どもたちの心を「音楽」という魔法を使って、豊かにするのが狙いだ。

同国内の難民キャンプにある25の小中学校には約6万5000人の生徒がいるが、生徒数に比べ学校や教員の数が少ない上、暗記だけの詰め込み教育が中心で音楽などの情操教育が軽視されていた。そこでJICAが2000年から音楽や体育などの職種で隊員を派遣。教員の能力向上や生徒の心の教育に取り組み、各地で住民や教員と協力して合唱やサッカーの全国大会を開催したことで、音楽や体育教育の重要性が認識され始めている。

生徒たちは音楽教員や隊員の指導のもと、約半年前からコンクールに向けて歌の練習を重ねてきた。当日は約700人の観客の前に、緊張した様子も見られたが、練習の成果を發揮し、のびのびと歌った。そして「来年も舞台上に立ちたい!」と笑顔を見せ、教員も「他地域の人々と交流し、良い刺激を受けた」と喜んでいいる。

リーダーの楮谷^{かみたに}紀子隊員らは「生徒にとって初めての試み。一筋縄ではいかなかったが、音楽をみんなで一緒に奏でることで仲間意識を強め、他者を思いやる心につながる。パレスチナ近隣地域の平和にも貢献したい」と、現地教員を中心に開かれる来年のコンクールに期待している。

